

## イスラム教の動向と中国の民族問題

野口 信彦  
2000年10月4日

ソ連崩壊以降、イスラム教とのかかわりからくる民族問題が一気に国際化し、政治問題として浮上している。

本稿では、まず地球人口の4分の1を占めるといわれる約13億人のイスラム教徒の動向と原理について及び昨今の世界各地での動きと中国における回族の歴史などについて触れてみたい。

### 一、イスラーム・世界各地の動き

ホメイニ師による“イスラム革命”から20年。イランで行われた選挙で保守派と改革派が激突し、結果は改革派が圧勝。イランは民主化への道を歩むことになったが、前途は多難である。

アジア最大のイスラム教徒の国インドネシアでは、98年の総選挙でイスラム政党が躍進した。指導者ワヒドが大統領になり、メガワティ女史が副大統領になった。ワヒド大統領はインドネシアからの分離独立を求めるアチェ州の説得に、“イスラームの寛容の精神”を掲げているが、アチェなどでのイスラム教徒とキリスト教徒との殺し合いの根は深く、憎しみだけが残っている。16世紀にさかのぼってオランダ植民地時代に、みずから植えた、キリスト教徒を優遇しイスラム教徒を差別する種がまかれていたからだ。争いが起こる前までは隣近所同士仲良しだったものが、宗教の違いという理由だけで、集団で襲撃し、殺し、犯し、焼く。根は深い。

トルコでは、人口の98%がイスラム教徒でありながら、政教分離の立場からイスラームとしての政治活動は禁じられている。しかし、99年8月17日にトルコを襲ったM7.4の大地震は人びとのイスラームへの回帰を促した。被災者たちは瓦礫の下からイスラームの聖典・クルアーンを真っ先に取り出し、アッラーへの祈りを捧げた。今後、トルコにおいてイスラームを標榜する政党が非合法化されるのか、EU加盟ともからんで民主化の行方が注目されている。



ソ連の崩壊後、イスラームが急速に復興するロシア。チェチェンが南のダゲスタンを占拠した。その“解放”の目的で、ロシア軍はチェチェンの首都グロズヌィを攻撃、カフカス山麓での冬の悲惨な戦闘が続いた。廃墟と化した首都を捨てたチェチェンのバサーエフ司令官は山岳ゲリラ戦を宣言した。それにたいしてロシアは“テロリストの一扫”を掲げて大量の軍隊を送った。現在、チェチェンは殲滅されたかにみえるが、今にいたるも戦いを放棄していない。イスラームを信じるタタルスタンのわかものたちが、祖国ロシアに背を向けてチェチェン軍に加わったという話もある。

2000年8月には、中央アジアのキルギスでアメリカの女性登山家ら4人が、イスラーム武装勢力に誘拐され、監視兵の民兵を谷に突き落として脱出に成功するという、映画さながらの出来事もあった。

その他の出来事を列挙すると、キルギスでの日本人技師拉致事件、コソボ問題とNATOによる爆撃、インド・パキスタンの国境・宗教紛争、イスラーム原理主義にのっとりたアフガニスタン・タリバーンの登場と政権奪取など枚挙にいとまがない。実に多くのことが、イスラームを信じイスラームに生きる人々に関わりのある地域で起きている。

イスラームの人口は地球上の貧しい地域で増加の一途をたどっている。労働者は熟練していないが、みな若い。イスラーム教徒は、みな実に寛容で屈託なく穏やかである。ムスリム地域では、持たざるものには例外なく金を与え、親切である。近い将来、イスラームが巨大な潮流となることは間違いないだろう。いや、すでに巨大な潮流になっているのだろう。少なくとも世界中のムスリムはそのように思っている。

21世紀は世界人口の4分の1を占めるムスリム(イスラーム教徒)、そしてイスラーム原理主義が国際政治にますます大きな影響を与えることになるだろう。日本においては、イスラームに関する誤った伝承が多い。マスコミによるイスラーム教にたいする偏見と誤謬を原因として、この問題認識を日本と日本人が抱くのは、まだ、かなり先のことになると思われる。国際政治はとくに私たち日本と日本人にイスラームの影響を鋭く突きつけているのである。

## 二、イスラーム原理主義とイスラームの宗教世界

イスラーム原理主義についていえば、ソ連が崩壊して冷戦時代が終焉を告げてから状況が一変した。

イラクは東側の援助がないまま単独でアメリカに挑戦し、アメリカ側の一方的な勝利に終わった。湾岸戦争後の中東は、まさにアメリカの独壇場になった。さらに、湾岸諸国の内政にも、アメリカは土足で踏み入るようになった。アメリカのすすめる“民主化”が、それぞれの国の状況や発展段階、経済事情を抜きにすすめられ、もはや湾岸諸国の富がアラブに配布されることはなくなった。それまでながい間放置されてきたパレスチナ問題の解決も、アメリカの主導のもとにすすめられるようになったため、パレスチナ側が一方的にイスラエルに妥協する形のものでしかなくなっていった。

こういった状況のもと、アラブ体制と一部の富裕階級に汚職がはびこってきた。PLOもその例外ではない。アラファト議長がすすめた和平は、一方的にイスラエルの要求に応えることによって、自分とそのとりまきの利益を維持していくというものでしかなくなっていった。

こうした時代の変化に取り残された層の不満を一手に取り込んでいったのが、イスラーム原理主義のグループだったのである。かれらは政府とアメリカを非難し、テロ活動を展開することによって大衆を味方につけつつある。しかし、その活動が、現在のイスラーム世界が抱えている諸問題を解決することにつながっていくとは到底考えられない。ここに現代のイスラーム世界の深刻さと困難がある。

21世紀、イスラームは地球の各地でどのような軌跡を見せるのか。イスラームと西暦を使用する西欧文明との共存・共生が重要な課題の一つとなっている。

イスラーム教の宗教名は、かつて回教とかマホメット教といい、予言者はマホメット、聖典は『コーラン』と呼ばれてきた。回教とはシルクロード経由の中国・回紇族（ウイグル族）の宗教という明らかな誤解から発生した名称であり、ヨーロッパ経由で伝来したマホメット、『コーラン』という呼び方は、発音が慣用化したものにすぎず、正しくない。

教義においても同様である。“イスラーム教徒は4人まで妻帯が許される”とか、“『コーラン』か剣か”といった、必ずしも正しくない内容が流布されたことも事実である。マホメットはムハンマドと呼ぶのが通例となっており、『コーラン』に代わって『クルアーン』と原音に近い表記をすることも増えてきた。

「イスラーム」については、未だその実態が知られているとはいえない。正しくは「イスラーム」と発音する。それは“帰依（きえ）する”という意味であり、唯一絶対なる神、アッラーへの服従を表している。仏教やキリスト教のように、仏陀やイエスキリストなどの創始者の名前を冠していないところに最大の特徴があるといえる。

形のあるものはすべてアッラーの徴（しるし）によるものであり、やがて滅びる。アッラーとはすなわち、唯一にして根本の原理そのものだということになる。したがって、イスラーム教では偶像をいっさい信じない。キリスト教のような十字架もないし、ユダヤ教のような紋章もない。「だからこそ、布教する相手にアッラーそのものを心の中に焼き付け、心に直接訴えるのだ」と、ムスリムは強調する。

イスラームの語源は、アッラーに絶対的な帰依をするものはすべて、人種、民族、国家を超えて平等に結ばれると考える。これは、近代以前からの人と人とのつながりを連想させるが、彼らが居住する地域の多くは、明らかに近代の西欧によって植民地支配を受け続けてきたところである。そうした過酷な支配を通過してもなお強い紐帯で結ばれるイスラームの同胞意識を、従来のナショナルなものとインターナショナルなものという対置した考え方で説明することは困難である。イスラームはトランスナショナル・国家横断的な存在と考えるほうが無理がないように思われる。

世界各地でもムスリム人口が急激に増えている。アメリカ最深部ニューヨーク・マンハッタンの大通りで、若者たちが礼拝する写真が大きく躍っていた。アメリカも皮肉にもイスラームへの改宗者が急増し、ユダヤ教徒をしのぐ勢いであるという。

一方、日本と多くの日本人はこれまでイスラームに関心を持たずに過ごせると信じてきた。しかし、現実に約20万人の在日ムスリムのビジネスマンや労働者・留学生が日本に来て多彩な文化を持ち込んでいる。

東京・渋谷区の代々木上原にトルコの援助による日本最大の壮麗なモスク（イスラーム教寺院）「東京ジャーミー」が2000年6月に完成した。日本人のイスラームへの改宗者も年々増え、すでに3千人のイスラーム人口がいるともいわれている。そして日本人がムスリムに

なる典型的パターンが、中近東への留学・赴任が契機だともいう。日本の新宗教、新興宗教に入信するのと同じ感覚であることに驚きをも感じる。ここにもトランスナショナルな潮流がある。

宗教的伝統の違いによる文化摩擦は全国各地で起きている。イラン人男性が自殺して、イスラム教義で禁じられている火葬にしてしまった事件、学校給食における豚肉提供の問題など、日本人とイスラームとの共存・共生も21世紀の課題になってきている。

西暦2000年4月6日は、イスラムの暦では1421年1月1日だった。579年の時空の差はキリスト教の世界・西暦を使用している世界各地の人々との、とてつもない距離をつくっている。現在、人類の英知はそのギャップを埋めることに成功していない。そのイスラム教徒は自分たちの教義とは無縁の20世紀末をどのように見ているのだろうか。若年人口が急増し、世界各地でイスラム教徒が増加し続けているこの宗教にとって、まだ時間はある。

21世紀に強引に進められるグローバル・スタンダード化の波に抗して、イスラムがどんな動きを進めるのか、私たち自身がその潮流の中に身を置いて流されながらも、見聞きしたイスラームを軸に世界を考えなければならない時代が確実にきていることが実感できる。

このような状況を、冷戦後における国家の枠組みをかえ、自分たちの国づくりをはじめようとする動き、民族を主体とした歴史的な文化や宗教にもとづく価値概念の表明とみていく必要があるといえる。

他方で、ヨーロッパ共同体（EU）に見られるように、政治・経済両面で国の枠組みを超えたアイデンティティの限界を乗り越えようとする試みもある。近代化をめざし改革開放20年をすぎた中国でも問題状況にそれほどの変化はない。

まもなく21世紀を迎える中国は、アジア全体の景気失速の影響をもろに受けており、ますます拡大する貧富の差、失業と農民の生活苦、盲流、環境・自然破壊そして民主主義と人権問題などがよりいっそう深刻になっていくことが予測される。しかし、それ以上にチベットや新疆における民族問題・分離独立の動きが、今まで以上に大きく浮上してくることは容易に予測できることである。中国にとって民族問題は現在、きわめて大きな桎梏となっている。

21世紀、日本はこのイスラムにいかに対応していくのか。日本と日本人に課せられた最も大きな課題の1つであろう。

### 三、イスラム教東漸の歴史

西域のオアシスの住人が民族的にはインド・イラン系であることは今世紀初頭に発見された文書で明らかになっている。タリム盆地にはインドから中央アジアを経て仏教が伝わり、一大仏教圏が形成された。その後、仏教は中国化され朝鮮半島を経由して6世紀半ばすぎに日本に渡来した。

7世紀、アラビア半島の一角に生まれたイスラム教は、アッラーを唯一の神とする一神教であった。イスラム教を国教として採り入れたアッバース王朝の拡大とともに、イスラームは瞬く間に中近東に広がり、やがてアフリカから中央アジア全域に拡大、10世紀に西域のカシュガルに入ってきている。

10世紀ごろ、この地にイスラム教が入ってきて以来千年。トルファン盆地を最後として、西域（現在の新疆ウイグル自治区）は全域がイスラム化した。あの西域各地の旧仏教王国のおもかげは、イスラームの“偶像否定”の関係で、かすかに石窟や故城の壁画などに残っているだけである。

タリム盆地のイスラム化は、やはりカラハン朝の進出がきっかけであった。10世紀、まずパキスタンとの国境タシュクルガンを経てカシュガル一帯がイスラム化されたが、ついで一大仏教王国であったホータンとイスラム勢力との熾烈な争いが展開された。しかし、この争いもイスラーム側の勝利に終わり、タリム盆地のオアシス勢力は急速にイスラム化されていく。この波に抵抗したのがトルファン一帯のトルコ人である。周辺がイスラム化されるなか、15世紀はじめまでは仏教を信仰していたことが記録に残されている。しかしイスラムを信奉するモグーリスタン汗国（モンゴル系イスラム教徒の国）の支配下に入ると、ウイグル族の多くが住むこの一帯もついにイスラム化し、タリム盆地全域のイスラム化がここに完成したのである。

天山南路北道の出発点として栄えていた北疆のトルファンは、9～10世紀に匈奴の支配から免れたあとも、北方騎馬民族の柔然や突厥などの侵攻を跳ね返していた。しかし、840年、モンゴル高原に住んでいたウイグル王国がキルギス族によって滅ぼされると、ウイグル族はモンゴル高原を下り、天山山脈一帯にいくつかの集団に分かれて住むようになった。トルファンもその波に飲み込まれ、急速にウイグル化がすすんだ。10世紀にはイスラム国家のカラハン王朝がタリム盆地を占領し、それまで仏教徒だった住民たちは次々にイスラム教に改宗した。これ以後、現在にいたるまで、新疆ウイグル自治区の大部分がイスラーム圏となっている。

イスラム化後のトルファンは、アッバク・ホッジャというイスラム教の聖職者が政治経済の実権をにぎり、タリム盆地の各国を巻き込んで勢力争いを繰り返した。

17世紀後半に中国を統一した満州族の清王朝は、新疆の混乱に乗じて遠征軍を起し1720年にトルファンを占領し、千年ぶりに中国王朝の直接支配下においた。しかし、その後も反乱が頻発し、戦略上重要であったトルファンはたびたび戦乱に巻き込まれて荒廃した。

20世紀になると、革命勢力・民族勢力が台頭し独立運動が活発になった。1944年11月にはカザフ国境に近いクルジア（イリ）地方に「東トルキスタン共和国」が成立し、1年余のあとにいたって中ソ両大国の干渉と陰謀によって崩壊した。その後、49年に人民解放軍がウルムチに入城すると、新疆は中国共産党の支配下に入り、55年10月1日に新疆ウイグル自治区がつくられ、現在に至っている。

現在の新疆ではウイグル、カザフ、回、キルギス、タジク、ウズベクなど10の民族はイスラム教を信仰し、モンゴル族は比率としては多くがチベット仏教（ラマ教）を、少数のオロス（ロシア）族はロシア正教を信仰しており、一部の漢族はキリスト教（景教）を信仰している。

#### 四、清朝、民国時代の回族と反乱

7世紀に誕生したイスラム教は、同時にアラブ・イスラム文明成立のときから、はるかな中国唐朝に強い関心を持っていた。「学問は遠く中国にあるが、行き、求めるべし」とい

うのが、イスラームの創始者ムハンマドの言葉である。

中国のムスリム（中国流に言えば回族・回民。回という語源と意味は不明）は、明らかになっているところでは、唐の時代、アラブ、ペルシアから来た人びとに源を持ち、13世紀、チンギスハーンが中央アジアのブハラ、タシケントを劫略し、多数のイスラム教徒を奴隷としてモンゴル、のちに元に連行したころにはじまる。

回族は、厳しい弾圧に激しい宗教戦争を戦った清の時代、抗日戦争で日本侵略軍の西方進出を阻止した民国時代、階級闘争と民族解放に揺れる現代と、中国史のなかでも一定の役割を果たしてきた。故郷を失い、母語を失い、血縁と信仰を自らのアイデンティティとして中国文化の海の中を生きつづけてきた回族の運命に、中国の国家体制にからむ民族問題の根幹を問うポイントがある。

唐朝時代、世界最大の国際都市であった長安は、宗教信仰の自由があった。キリスト教のネストリウス派、拝火教と呼ばれたゾロアスター教、マニ教などの宗教が存在した。ところがイスラム教以外の宗教は、時間がたつにつれて勢力が弱まり、やがてはその多くが消滅していったのである。その一方、「胡」とか「蕃」と呼ばれた西アジア、および中央アジア系の外国人すなわち突厥（とっけつ）、ウイグル、北狄（ほくてき）、インド、大食（タージ）、ペルシア、ソグディアナなど各地、各種族を含んだ外国人集団の中にも、イスラム教徒だけは回族の形で今まで残され、他の各種族の人々はまったく中国と漢族に溶け込んでしまったのである。

19世紀後半、清朝末期「太平天国」という民衆による全国的な大反乱が起きた。太平天国の嵐は全国に吹き荒れ、中国のいたるところで反清の炎を燃やした。回族の集中していた地域では漢族と回族の反目が激しくなり、ついに太平天国の乱の一支派であった回族大反乱にまで発展した。歴史上、この反乱は「同治回乱」と呼ばれている。反乱の中心は新疆、西北および雲南にあった。この回族の大乱は1855年から73年にわたって実に18年間におよんだ。漢族に虐殺された回族の実数は明らかではないが100万人ともいわれ、肅州は“ひとりも生き残りを許さない”という清朝の方針で皆殺しにあい、今でも回族人口が激減したままの地域もある。陝西省の回民の9割、甘肅省回民の3分の2の人口が虐殺され、清朝末期だけでも中国の回族の半数以上が殺された。

しかし、“回族をみれば殺す”という恐怖政治の中で、回族を裏切る卑劣な人物が現れ始めた。彼らは回族の上層部に多く、やがて回民の軍閥にのし上がっていった。

1935年、国民党政府の大軍に追われた中国共産党の率いる紅軍は、江西省などの大本営を失った。やむを得ず紅軍は2万5千里の長征を経て中国の南から北方まで転出した。陝西省に到着した第四方面軍に属した第五軍は馬歩芳の騎兵部隊に包囲され、37年正月に甘肅の高台で全滅した。だが、この事件以降、紅軍の連続した敗北という事態は、ちょうど起こった西安事件を契機とした国共合作という事態によって回避された。

また、抗日戦争の時期、日本軍部は中国国内の民族問題と歴史問題を利用して、中国内部をかく乱する戦略が一定程度、功を奏した時期があった。傀儡「満州国」の次に、内モンゴルの民族問題を狙って第二の傀儡国「モンゴル自治政府」をつくった。モンゴル民族主義の促進をこうしてすすめ、結果として、日本侵略軍の手先になってしまったのである。当時の日本が、自国から遠く離れたところで民族問題という入り口を見つけ、中国を一時的にせよ連続的に分裂させることに成功したことは、驚くべき出来事であった。日本軍部

がその持っていた知識、その戦略、攻撃の実行において、多民族国家中国の弱点を巧みにつuitしたのは歴史の事実である。

同治の反乱の際、回族の一首領・白彦虎（はくげんこ）は内モンゴル、青海、甘肅と転戦し、最後には新疆に落ち延び、天山山脈の南北で3年半もウイグル族と連合してたたかい、やがては国境を越えてロシア領内に逃亡した。

清朝は異民族であるモンゴル、チベット、新疆内の各民族を統治するために権謀術数を凝らした。清王朝が地域や民族によって統治形態を使い分けたのは、清朝体制そのものが圧倒的多数である漢族に囲まれた不安定なものだったため、非漢民族をたくみに間接支配することで、漢族に対抗できる力量にする必要があったこと、そして同じチベット仏教世界である内外モンゴルとチベット地域の間“新疆のイスラム世界”をもって楔を打ち込む、という配慮があったことも否定できない。

一方、辛亥革命でアジア初の共和国となった中華民国において、臨時大総統・孫文の「五族共和論」（「国家のみなもとは人民にある。漢、満、蒙、回、蔵の諸地あわせて1人とする。これを民族の統一とする」）も、人民主権をうたった臨時約法も、その後実施されたことはなかった。モンゴル・チベットなど大清帝国藩部を管轄していた理藩部は清末に理藩部が変わり、権力もほとんど失っていた。民国政府は内務部の下にまず蒙蔵事務所を設け、民国3年には大総統直属の機構として蒙蔵院を設置した。大総統袁世凱在世中はモンゴル、チベット問題は袁世凱の専管事項だったし、彼の死後は蒙蔵院も名目的なものになり、辺境は放置されるままだった。南北対立、軍閥混戦、列強侵略の野望の前に中央権力はきわめて脆弱だったからである。こうして1910～30年代前半まで新疆、青海などと中央の関係はきわめて疎遠で、チベットに至っては清朝期よりももっと独立状態にあり、17年の第1次康蔵（西康、つまりカムとチベット）紛争、30年の第二次康蔵紛争など辺境では衝突が絶えなかった。また内モンゴルを実際に握っていたのは各盟に盤距していた地方軍閥だった。

近代国家をめざす中国に辺境・民族政策が生まれてくるのはようやく1924年、共産党との合作を実現した国民党1回大会においてであった。

#### 四、ウイグル民族の宗教と生活習慣

ここで少々趣（おもむき）をかえて、ウイグル民族の宗教と生活習慣を垣間見ることにしよう。

ウイグル民族はイスラム教を信仰する民族で、日常生活の中に宗教的な習慣が多い。例えば、モスクへ礼拝に行く習慣があり、原則として1日5回、朝・昼・夕方・晩・夜に礼拝をすることになっている。そして、毎週の金曜日の昼（ウルムチでは12時40分から1時10分まで）モスクに礼拝に行く。礼拝の意味は、自分がムスリムであることをアッラーに報告し、自分の人生の中で不幸なことが起こらないよう、または家族や親戚の無事と子どもたちの将来の幸せを祈ることである。

モスクに女性は入れない、女性は自分の家で拝む。豚、犬、猫、鼠と事故で死んだ動物の肉は食べない。豚などの肉を食べないのは、その肉には人間の体に良くない細菌（悪虫）があるからであり、事故で死んだ動物は体内の血が完全に外に出されていないから腐りやすい、だから食べないのである。ムスリムはお酒を飲まないことになっている。お酒を飲

まない習慣があるのは、昔、酒を飲んで戦争に負けたことがあるからである。

ウイグル人は子どもが生まれて7日目に名を付ける習慣がある。祖父祖母と相談した上で父親が子供の名前を決める。近くのモスクのモラームを呼んで子供に名前を付けてもらう。子供の名前の後ろに父親の名前がつく。これは住民登録や他の同じ名前の人と区別するためであって、代々続く名前ではない。ウイグル人には苗字の習慣はない。子供に名前をつける時、親の希望も含めて考えて付けるのだが、名前を聞くだけで男女が区別できる。男の場合は、神様の使者や昔の英雄の名前などがよく使われる。例えば、「ムハメッド、イブライム、イスマイル(アッラの使者)とカヘルマン(英雄)、パルハッテイ(恋愛仙人)」など。女性は花や姫などがよく使われる。例えば、「アイグル(月の花)、パリザット(天国の姫)、ユルトズ(光る星)」など。それとは別に、また日常生活の中で使われている良い意味を持つ「言葉」もそのまま名前として使われることもある。例えば、「アダラット」は「正義」という意味で、「ムバラク」は「おめでとう」という意味を表すが、よく人の名前として使われている。

子供が生まれて40日目はその子の将来を祝う日、近所の子供たちを呼んで甘いものを食べさせる。子供たちは甘いお菓子を食べながら赤ちゃんの将来の幸福を祈る。男の子どもが7歳になったら「割礼(かつれい)」という儀式を受けなければならない。この日は親戚や近所の人たちを自宅に呼んでご馳走が出され、モスクのモラームを呼んでクルアーンを読み、子どもの健康を祈り、これからも元気で成長できるようにと祈る。「割礼」は昔から伝わっている宗教的な習慣の一つである。昔は、ハルフトムと言われる専門家がやっていたが、現在では外科の医師がやっている。女の子の場合は、「ボシュクトイ」という儀式が行われるが、赤ちゃんが一才になる前に行われるのが普通である。クリトリスを切ることがあるが、通常は小陰唇を切るようである。

子供にたいする親の義務は、ふつう子供が結婚するまでだが、結婚してからも親の脛をかじる子供もいる。これは世界中どこでも同じだ。

中国人は新郎新婦の年齢を合わせて50歳になっていなければ結婚できない。しかし、ウイグル族など諸民族にたいしては、この法律が厳格ではなく、農村地帯では男は18歳、女は16歳から結婚することができる。少数民族は2人までは子どもを産むことが許されており、中国人の一人っ子政策より有利である。

ウイグル民族は異教徒とは結婚しない、宗教が違うことで習慣も違うからである。どうしても結婚する場合は、相手に先にイスラームの信者になってもらう、結婚してからも宗教を守ることが条件とされる。同じ宗教で違う民族と結婚する人もいるが非常に少ない。

ウイグル人の家は日干し煉瓦とポプラの木で作られる。庭があって、庭にはぶどう棚や果樹がある。建物の中には客室、寝室と台所または物置部屋がある。家の中は胡座(ゴザ)の上に牛や羊の毛で作られたじゅうたんを敷く。洋式のテーブルや椅子はあまり使わない。食事するときはじゅうたんの上の細長い敷布団の上に座り、低い食卓を使う。祖父祖母に孫など大人数家族と一緒に住むのがふつうである。末子相続といって一番下の子が親の面倒を見るので、親から残された遺産は他の兄弟より多くもらえる。

ウイグルは昔から遊牧民でもあり、家畜を飼って農家の生活を送っていたが、今では定住生活をする人たちも多い。馬、ロバ、ラクダは農家の交通運搬機で、牛や羊は農家になくなくてはならない家畜である。そして、農家で最も大事な宝ものは、ロバ車である。ロバ車



こそ農家と畑または町のバザールの間では重要な役割を果たしている。ロバ車はポプラと榆の木を材料に農民が自分たちで造る車である。

ウイグル語については文革の時期、ローマ字を強制的に使用させられたが、文革後、ウイグル民族の代表が人民代表大会で要求してもとにもどった。

ウイグル語は、アラビア語を元にして作られた「ウイグル文字」を使用するが、就職のため現在では、小学校3年生から中国語を勉強しなければならない。なぜならば外国語を勉強するには中国語が必要だからである。大学はすべてが国立大学だが、新疆ウイグル自治区では8つしかない。大学が少ないのと、入学試験が難しいことと、大枚のお金が必要になるため大学への進学率はわずか15%に過ぎない。殆どの学生が高校卒業後、就職するか、あるいは親の仕事に就くのである。 ( 続く )

#### 参考文献

- 『世界』9月号 特集「イスラーム わが隣人たち」
- 『イスラーム潮流』NHKスペシャル「イスラーム」プロジェクト NHK 出版刊
- 『イスラーム教の本 唯一神アッラーの最終啓示』学研社刊
- 『シルクロード波乱万丈』長澤和俊著 新潮社刊
- 『回教から見た中国 民族・宗教・国家』張 承志著 中公新書
- 『周縁からの中国 民族問題と国家』毛利 和子著 東京大学出版会